

はじめに

「地域づくり」は「未来づくり」

地域活動実践センター長 澤崎 敏文

変化の時代だといわれて久しいですが、本学が位置する福井県も近年大きな変化が訪れています。2018年度は福井県では2度目となる国民体育大会（国体）が開催され、5年後に迫った北陸新幹線の福井延伸に向けて、市街地エリアをはじめ様々なところで都市整備が進んでいます。一方で、国際化が多文化共生へと発展し、国際交流、国際貢献といった海外に目を向ける時代から、訪日外国人の増加等海外から注目される時代、多様な価値観を持った人々がお互いに理解して共に生活する時代になりつつあるといわれています。加えて、今年は37年ぶりとなる豪雪が本学も含めた福井県地方を襲い、全国的にも大きなニュースになりましたが、除雪の対応など行政と自治会等地域の新たな課題がクローズアップされた年でもありました。このような中、「まちづくり」「地域づくり」といったキーワードが頻りに登場してきますが、この激動の時代に即した「地域づくり」とはどうあるべきかが問われ始めています。

一方、教育の現場では、アクティブラーニングというキーワードが旬です。アクティブラーニングとは主体的な学び。そして、本学では、様々な機会をとらえて、学生が主体的に学ぶことができる場を学内だけに留まらず、学外にも広げています。私の研究室でも、福井県、福井市等の自治体をはじめ、様々な企業や団体の方々

との連携協力を要請されることが多く、学生らが授業の一環として地域の方々と交流する機会も増えてきました。これらは一見すると、実学主義的に聞こえるかもしれませんが、社会と関わりながら学ぶことは応用の連続であり、不確実性への対応の連続でもあります。冒頭に変化の時代と書きましたが、変化のなかった時代はありません。仏教にも「諸行無常」という言葉がありますが、世の中が常に変化し、一定ではないからこそ、その変化に対応しイノベーションが起きます。この変化の時代に、地域というフィールドに飛び出て、教室での学びをリアルな学びに変換させることは、究極の教養教育ではないかと考えています。

次の時代を担っていくのは現在を生きる若者です。変化に迅速に対応できる若者が、今こうやって大学を飛び出し、いわゆる地域づくりに参加しているからこそ未来は明るい。現在というこの土台は、過去があるからこそだと思いますが、その現在をしっかりと築き上げることは、未来への礎を作ること。そういう意味でも、地域づくりは未来づくりだと思うのです。

今、大学が地域に出て実践活動を行っていくことの意義を再度問われている気がしています。その為には、まずは教員・学生自らが行動すること。地域活動実践センターは、今後もそのような地域との橋渡しを果たせるような機関でありたい。そう思うのです。